

しゅはり

第3期 OB 森岡 耕作

皆様のおかげをもちまして、大学教員として東京経済大学に奉職いたしまして3年目を終えようかとしております。増えゆく体重で、風体だけがそれらしくなってきたかのように思いますが、まだまだ慣れないことも多い日々です。他方、それゆえにかもしれませんが、刺激的な日々を過ごしているとも理解できます。そこで、そのような日々を、皆様へのご報告と私自身の振り返りも兼ねて、今年1年、また小野ゼミでの学究生活との異なることに焦点を合わせて書いてみようかと思えます。

さて、昨年3月。2名のゼミ第1期の卒業生を送り出して間もなく、新たに13名の新規ゼミ生を迎えることになりました。ただし、以前、本会誌でご紹介したとおり、13名の入ゼミ生はすべて2年生です。ゼミを専門演習と位置づけるのであれば、通常であれば教養課程にいるはずの2年生にとって専門科目は少し早すぎるように感じます¹。しかし、やれと言われるのであればやらざるを得ません。そこで、思い切って、関東学生マーケティング大会²に出場してみるかどうかを2年生に尋ねてみました。

「マーケティング」という学問領域では、その性格上、大学生向けのビジネス・アイデア・コンペの類の大会は多いのですが、意外と論文を執筆して他大学と競うような大会は少ないのが現状です。土地柄、引きこもりがちな東経大生を活発な都心大学の学生と接触させる意味で、私のゼミでも少ない機会を逃さないように、3年生が出場していました。そこに2年生も参加してみないかと尋ねてみたわけです。どうせやれと言われてい



ゼミに講演にきてくれた同期の中村満隆・電論代表
によって伝授された ハッスル3本締め@関マケ

¹ ですが、知名度の低い中規模大学では、他大学との競争上、少人数教育に力を入れる傾向にあり仕方がないことです。

² 旧称、関東十ゼミ討論会です。2012年度大会より改称しました。

るのであれば、振り切ってやっつけてしまおうと思ったのが正直なところですが、彼らは積極的に参加することに同意しました。結果として、3年生に劣らない論文を仕上げてきましたし、本大会においてもすべてのチームが1回戦を突破してくれました。「できるかできないかではなく、やるかやらないかの差でしかなかったのか。」彼らに教えてもらいました。



夏合宿@沖縄に
(著者は左奥)

第2に、小野ゼミでの2年間で異なることと言えば、夏合宿で沖縄へ遠征したことでしょうか。合宿と言えば、関東甲信越を暗に前提としていたのですが、ゼミ生の中から「夏なのだから沖縄に行きたい！」という声があがりました。確かに、卒業したOGに連絡したところ、夏合宿予定期間に多忙であると判明したために、それならばと許可しました。設立して間もないゼミだからこそ可能なことだったのかもしれませんが、とは言え、あまりに旅費が高額になってしまえば、実現できなくなることを懸念していましたが、LCCとペンションをそれぞれ利用することでそれを解決しました³。確かに自炊するなどに起因して、大げんかが勃発するなどの困難もありましたが、予算制約という制限が、新たなゼミ合宿のあり方を提示してくれました。

³ 合宿総費用が26,000円/1人でした。9月上旬でハイシーズンから外れているとは言え、正直、驚きました。



工学院大学の研究室，東経大3ゼミのPF合同プロジェクト
(著者は右奥)

第3は、理系学生とのコラボレーションでしょうか。昨年3月に、同僚の先生にお誘いいただいて、工学院大学のヒューマン・インターフェースを研究している研究室と一緒に、パーソナル・ファブ리케이션（PF）に関連するプロジェクトをスタートさせました。3Dプリンタが昨今、話題にのぼることが多くなっていますが、本プロジェクトは、理系学生と文系学生（リスク・マネジメント、知的財産、そしてマーケティング）がPF現象について協働したときにどのような創発が起こるのかということを見てみようとする、ある意味で実験的・試行錯誤的プロジェクトです。相互に単科大学であるということが教育上のデメリットになっているとの認識から、このようなプロジェクトにつながっていった背景があるのですが、思い出してみると、医学部から文学部までを有する総合大学であるはずの義塾においては、なかなかこのような共同プロジェクトはなかったのではないかと推察します。ともあれ、結果として、相互の学生が一緒になってもものづくりに取り組み、いろいろと面白いものを生み出していました。また、一部の学生はこのプロジェクトをきっかけにして、新事業を計画しています。他方、私自身につきましても、理系研究室で様々な機械・ソフトを見せていただいたことをきっかけに、4Pで言えば、Productに焦点を合わせて研究を展開したいと思うようになりました。



ゼミ生による研究発表@Singapore

最後に、海外での学会発表でしょう。正確に申し上げれば、私が学生時代だったころにはこのような企画は小野ゼミでなかったのですが、7期生以降、小野ゼミでは英語で論文を執筆し、それを海外の学会で発表しています。それに倣って、ゼミ生に行く気があるか尋ねてみたところ、躊躇しながらも「はい」と答えました。何ぶん、英語の論文を読むことにも多くの時間をかけなければならない彼らにとって生易しいことではないことを承知した上で、作文を（ほぼ）手伝いながら、9月にシンガポールで発表して参りました。確かに英語は拙かったかもしれませんが、他方で、何かしらの自信を獲得したようです。実際、発表者の1人は、就職後シンガポールでの勤務の可能性があり、それに尻込みしていたようですが、すぐに内定先企業に連絡をして、5月からの当地での勤務が決まったようです。また、帰ってきた彼らを見た他のゼミ生が触発されて、今月中頃に別なグループがマレーシアで発表をするまでになりました。

ゼミを設立した当初は、私自身が学生時代に経験したことを繰り返すことで精一杯でしたし、そのことに、もやもやとした無力感を抱いてもしました。しかし、雑多ではございますが、こうして書きながら今年度を振り返ってみますと、少しずつではありますが、何やら新しいことを生み出せるようになりつつあると思えるようになってきました。もちろん、それを生み出す主体は必ずしも私ではないですし、きっかけの多くが小野ゼミにあります。ただ、そのことが先のもやもやを霧散させつつあるようにも感じます。駄文ではございますが、ご報告とともに、小野晃典先生をはじめ、先輩、同期、そして後輩と、小野ゼミの皆様へ改めて感謝いたします。